

# 「建築のインターフェイスに関する研究」

—表層領域の構成と接続からみた住宅作品の空間構成—

0259 二瓶士門

指導 高宮眞介教授 佐藤慎也助手

## ■序言

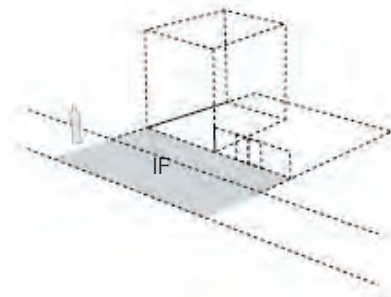
□インターフェイス（表層領域）の意味と研究背景

本研究では、インターフェイス（以下：IF）の意味を、建築の立地や、そこにある機能に関わらず、建物に面する前面道路（以下：R）及び、建物の面と敷地境界に挟まれた空間を、一体としてみる空間のことを指す [Fig1]。その建築のIF（表層領域）をみる視点の中心は、Rと敷地との境界あたりにある [Fig2]。ここで言うIFに属さない、外部空間（以下：E）とは、IFとの接続関係に、調節可能な扉や、塀などによって、平面計画的に一度切断される、敷地内の外部空間を指す。したがって、IFをもたない建築はないが、Eをもたない建築はある [Fig3]。構成が [Fig3] の場合、濃いグレーに塗られた部分が本研究でのEにあたる。このような空間の括り取り方は、あるいは恣意的に見えるかもしれない。表層領域という名詞自体は一般的ではないものの、ここで呼ぶ空間のまとまりを意識し、そこを特別な場所だと考えることは、一般の居住者にとってはきわめて自然なことのようと思われる。塀付の住宅の住人は正月に備えて建物だけでなく、門の周りも等しく掃き清める。販売促進のために店構えに手を加えようという商店主がファサードと看板の付け方を別物として切り離して考えることはない。それらは一体の空間であると考えている。他方で、よい空間というものは、デザインだけによって決定されるものではない。フィジカルなところ、そこにあるソフト、その場にいる人のキャラクタが大きく関与するところであり、示唆したものとして、せんだいメディアテークがある。建築側から積極的にソフトやキャラクタといわれる、くくりを超えてよい空間を目指し、今も運営されていることは評価に値する。本研究では、その自己組織化する運営スタイルを内包する空間を「うれしい環境（愛着のある場所/私の○○○）」と呼ぶ。（○○○の中には、同潤会アパートといった、場所を指し示す固有な名詞などが、あてはまる。）うれしい環境とは、当然のことながら、複雑な人間の活動によって生み出されるものであり、モダン空間、ヴァナキュラーな空間、もしくは仮設的であっても、あり得る状態である。どこまで、設計者が思い入れをしているかは建築のメディアから、もしくは本人からでも正確に把握することは難しい上、そのことのみがうれしい環境を構成するものではない。加えて、機能という名目下で、複雑な行為を単純化し、空間配列を行ってきたモダニズム以降の建築物の耐久時速より早い速度で、建築（環境）が破綻する可能性を、示唆するものとして、日本大学が買い取った磯崎新のお茶の水スクエアを、「解体する」ニュースは記憶に新しい。このことは近年、建築を構築するスタンスにおいて、建築計画的な類型化された体型の中で、デザインを考えるパラダイムをシフトさせる、きっかけになっている。

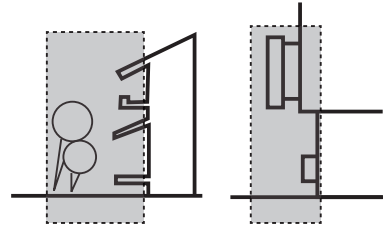
□背景をふまえた研究目的

建物には、いわゆる建築家がつ作ったもの、そうではないヴァナキュラーなものがある。しかし、目に入る物のほとんどは、団地や、乱立するオフィス群、急激に拡大したニュータウンによって風景が構築されている。そういった圧倒的な量をアンチフォーカスなスタンスで、目の前にすると（予算や時世 期間 規模 施主 目的 法規 嗜好 流通 規格といった）制度によって建物が、自動生成的に出来ているかのような錯覚をもつ。乱暴な言い方をすると、キャッチアップ型の整理作業の中で、それなりの調停案を作ることへの危機感が、デザインのきっかけに感じることさえある。この見方で建築を作ろうとすると、デザインの価値を見いだせない。あくまで、今述べられたのは所感的なことであるが、うれしい環境を目指すなかで、建築計画的な体系では、括れにくい、もしくは、括られてこなかった部分を、意識的に抜き出すことによって、新たに建築（環境）を評価する視点を、模索することは意義があり、建物の内外とIFの間にみられる接続のされ方を検討し、IFからみた住宅の空間構成を明らかにすることが目的である。

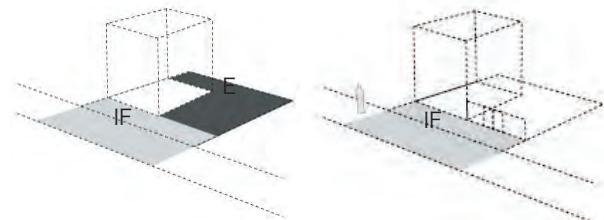
[Fig1] 建築のインターフェイス（表層領域）の場所



[Fig2] 建築のインターフェイス（表層領域）を見る中心



[Fig3] 本研究で定義される外部空間の場所



[表1]. 資料リスト

- |    |                   |    |                   |
|----|-------------------|----|-------------------|
| 1  | パティオのある家 林雅子      | 21 | 西所沢の住宅 佐藤光彦       |
| 2  | アニハウス 塚本由晴        | 22 | 風子ハウス 中村好文        |
| 3  | 相模原の家 みかんぐみ       | 23 | 黒の家 千葉学           |
| 4  | 梅ヶ丘の住宅 佐藤光彦       | 24 | 仙川の住宅 佐藤光彦        |
| 5  | 大島の住宅 佐藤光彦        | 25 | 世田谷住居 ファクターN      |
| 6  | 太田のハウス 西沢大良       | 26 | L 青木淳             |
| 7  | 東大阪の家 岸和郎         | 27 | 桜上水K邸 伊東豊雄        |
| 8  | 東灘の家 岸和郎          | 28 | C 青木淳             |
| 9  | M-HOUSE SANAA     | 29 | 町田の家 宮脇檀          |
| 10 | Hu-tong House 岸和郎 | 30 | 八王子の家 手塚貴晴        |
| 11 | 堺の家 岸和郎           | 31 | ミニ・ハウス アトリエワン     |
| 12 | 和歌山の家 岸和郎         | 32 | 祐天寺T邸 伊東豊雄        |
| 13 | 小川邸 椎名英三          | 33 | House SA1999 坂本一成 |
| 14 | ダスハウス アトリエワン      | 34 | B 青木淳             |
| 15 | ガエハウス アトリエワン      | 35 | NT ADH            |
| 16 | ジグ アトリエ・ワン        | 36 | ナチュラルシェルター-遠藤政樹   |
| 17 | 東大津の家 岸和郎         | 37 | 保土ヶ谷の住宅2 佐藤光彦     |
| 18 | 稲城W邸 伊東豊雄         | 38 | 指扇の住宅 佐藤光彦        |
| 19 | 江東の住宅 佐藤光彦        | 39 | 千石の住宅 佐藤光彦        |
| 20 | 新井菜師の住宅 中村好文      | 40 | 壁のない家 手塚貴晴        |
|    |                   | 41 | 空をつかまえる家 手塚貴晴     |

□分析の方法

本研究は、便宜的に現代の建築ジャーナリズムの中で代表格と考えられる「新建築住宅特集」に1996年から2003年の間に掲載された専用住宅から、写真や模型、図面、その作品に付随する論文から、IF（表層領域）における構成が確認でき、特に敷地面積の大きいもの（500平米以上）を除いた、41作品を対象にする。住宅におけるIFの構成、IFの視線と動線による接続を全ての住宅で検証。IFの構成と、視線・動線の接続から全住宅のマトリクスを作成する。

■本論

□IFからみた住宅の空間構成の要素

前面道路 /Road (R)

内部空間 /Interior (I)

外部空間 /Exterior (E)

表層領域 /Interface (IF)

□住宅におけるIFの構成

IFの構成としては、以下の三つがみられた。

街路境界と塀、もしくは街路境界とRに面する立面との距離が、植栽程度の際間しかなく、IFに含まれる空間がRしかないもの。(11/41)

・軒や、ピロティなどによって、雨がしのげる程度のしつらえの場所があり、その場所が、Rに直接面し、建具や塀などで建築計画的にRと切断されない、Rとの一体の外部空間があるIF。(8/41)

・建築計画的にRと切断されない、青空天井の空間（駐車場や、庭として使われる場所）と、Rとの一体の外部空間があるIF。(22/41)

□IFの視線と動線による接続

IFと建物のIおよび、庭などのEとの接続を、

ドアや開口によって、行き来できるのかといった動線の接続の有無と、壁や塀、植栽などによって遮断されることなく視線が連続するのといった視線的接続の有無の検討。

□IFの構成、IFの視線と動線による接続を全ての住宅で検証。

[fig8 分析例]No34.B/ 青木淳

・IFの構成→R+ビルトインタイプ

・IFとEの接続→視線による接続のみ

・IFとIの接続→視線と動線による接続

■結論

本研究では、一つの住宅が道路に面することによって、必然的にできる、表層領域という空間をとりあげ、敷地境界にとらわれず、IFの構成と、IFとの接続要素の視線・動線による接続の有無について検討した。IFからみた住宅の空間構成は、

(1)I,Eともに、IFと接続するもの

(2)IFがE,Iどちらからも、独立して存在するもの

(3)Eを持たず、IFが敷地の奥の方まで、進入するもの

の三つに大別できることがわかった。

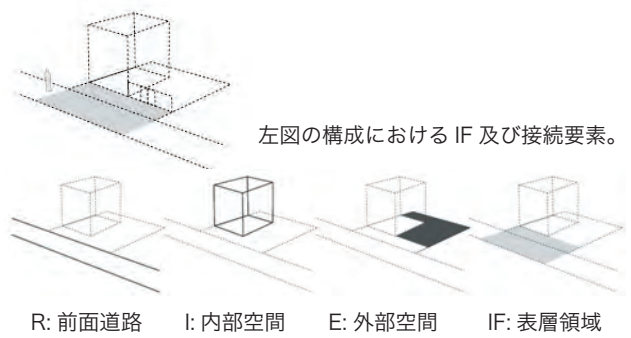
かつて、建築家に住宅を依頼する主は、資金的に余裕があることが、必然条件としてついてまわっていたのだが、近年、メーカーや工務店よりも、ローコストで住宅を手に入れられる逆転現象が生じ、新しいみえ方をする建築が、目に付くようになってきた。

先ほどの、(1)(2)は、今までも、建築のたち方としてよく見受けられたもので、みえ方としては、前面道路に対して接続関係を遮断する手法をとることによって、内側に豊かな空間を得ようとする同時に、出来るだけ広い内部空間をとることが、適切な空間の大きさだと考えられてきた。

(3)が、近年、目に付くたち方をするものである。住宅を構成する時に、内側へ興味に向いていた思考を一度切断し、外部に存在していた余剰スペースをひろげ、かつての壁や塀が変わって、魅力的な外部空間を配すものや、道が延長するかのよう、敷地に引き込み、魅力的な路地をつくることによって、豊かな内部空間と同時に、余剰を切り落とすことによって生まれた外部空間も魅力的な空間にすることで、新しい建築のみえ方をするものが出てくるようになった。

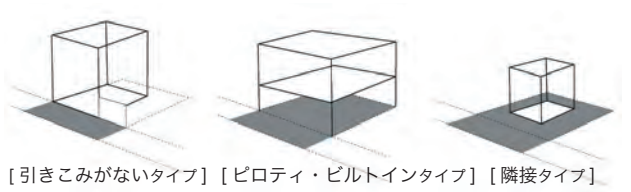
今回は、建築計画的な視座に立って、接続要素の関係のみで、住宅を観察したが、もちろん、調査した住宅は、設計者によって、構法や素材、プロポーシヨンの修辭などを利用して、新しいみえ方へ挑戦しているものがある。本研究では、住宅を構成する上での媒介要素として意識的にIFという要素を抜き出し、最近の傾向と、IFを積極的に利用することで、住宅の全体を組織しうる可能性を示すものとする。

[fig4 IF及び接続要素]

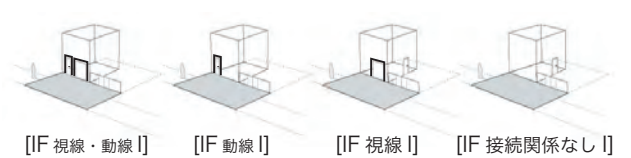


左図の構成におけるIF及び接続要素。

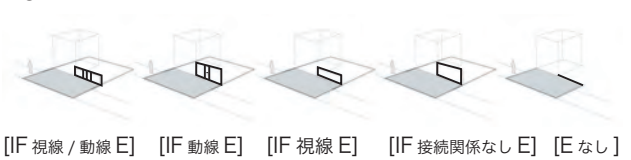
[fig5 IFの構成]



[fig6 IFとIの動線・視線による接続]

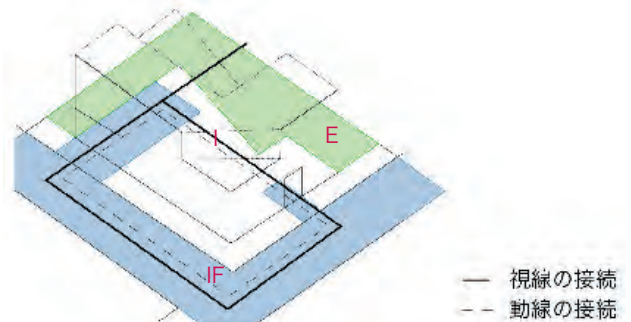


[fig7 IFとEの動線・視線による接続]



[fig8 分析例]

No34.B/ 青木淳



[表2.IFの構成と接続による空間構成]

IFの構成と、視線・動線の接続からマトリクスを作成する。

(E)との接続	(IF)の構成	(IF)視線・動線(E)	(IF)動線(E)	(IF)視線(E)	(IF)関係なし(E)	(E)なし
(I)との接続						
(IF)視線・動線(I)	Rのみ			21,34		
	R+ピロティ					
	R+青空外部	27				26,14,23,24,33
(IF)動線(I)	Rのみ	25			19,20,29,31,40	39
	R+ピロティ		1	37	26,30,38	
	R+青空外部	35	17,18,22		13,15,28,36,41	45
(IF)視線(I)	Rのみ					
	R+ピロティ					
	R+青空外部					
(IF)関係なし(I)	Rのみ		7		8,9,11	
	R+ピロティ		16			
	R+青空外部	32	3,10,12			